装いの力ー異性装の日本史

The Power of Clothing: History of Cross-Dressing in Japan

2022年9月3日（土）ー 10月30日（日）

●前期：9月3日（土）ー 10月2日（日）
A期間：9月3日（土）ー 9月19日（月・祝）　B期間：9月21日（水）ー 10月2日（日）
●後期：10月4日（火）ー 10月30日（日）
C期間：10月4日（火）ー 10月16日（日）　D期間：10月18日（火）ー 10月30日（日）

※会期中、一部展示替えがあります。

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、展覧会の会期・開館時間・イベント等が変更・中止となる場合がございます。最新情報は当館HPまたはSNS等でご確認いただきますようお願いいたします。

①篠山紀信《森村泰昌『デジャ=ヴュ』の眼》1990年　作家蔵

◆展覧会概要

男性か女性か―人間を２つの性別によって区分する考え方は、私たちの中に深く根付いています。しかしながら、人々はこの性の境界を、身にまとう衣服によって越える試みをしばしば行ってきました。社会的・文化的な性別を区分するための記号である衣服をもって、生物学的に与えられた性とは異なる性となるのです。もちろん、異性装を実践した人物の性自認や性的指向は非常に多様なものであり、それらが異性装とともに必ずしも自動的に変化するということはありません。

日本には、ヤマトタケルをはじめとした異性装をしたエピソードの伝わる神話・歴史上の人物たちが存在するほか、異性装の人物が登場する物語や、能・歌舞伎といった異性装の風俗・趣向を反映した芸能も古くから数多くあります。古代から近世を経て、西洋文化・思想の大きな影響下にあった近代日本社会では、一時期、異性装者を罰則の対象とする条例ができるなど変化がおとずれますが、それでも現代まで異性装が消えることはありませんでした。本展では、絵画、衣裳、写真、映像、漫画など様々な作品を通して各時代の異性装の様相を通覧し、性の越境を可能とする「装いの力」について考察します。特に現代では森村泰昌の作品やダムタイプのパフォーマンス記録映像の展示のほか、1989年12月に始まったドラァグ・クイーンによるエンターテインメントダンスパーティー“DIAMONDS ARE FOREVER”メンバーによる、本展のためのスペシャルなインスタレーションが展開されます。

近年では、人間に固定の性別はなく、従って「男性／女性」という二者択一の規定を取り払い、多様な性のあり方について理解し、認め合うという動きがでてきたものの、実際には性別における二項対立の構図はいまだに様々な場面で目にするものでしょう。男らしさ、女らしさとは何なのか。日本における異性装の系譜の一端を辿ることで、それらがどのように表現されてきたのかということを探り、「異性装」という営みの「これまで」と「これから」について考えます。

◆ 展覧会構成

1章　日本のいにしえの異性装

日本において異性装について言及された最古の例としては『古事記』まで遡ることができる。九州討伐を命じられた小碓皇子 （おうすのみこと／ヤマトタケル）は、髪をおろし、女性の衣服を身にまとうことで、自身を美しい女性と勘違いした熊襲兄弟が気をゆるした隙をついた。

この他、平安末期から室町時代までに成立した中世王朝物語では、『とりかへばや物語』や『新蔵人物語』など異性装の登場人物たちの恋愛や政治的駆け引きを描いた物語が存在するほか、能など中世芸能において異性装は珍しい要素ではなかった。

本展では、こうした神話や創作物語、芸能における異性装に加えて、男装の女官の「東豎子（あずまわらわ）」や、僧侶と共にいる女装の稚児など、実社会において役職や立場から異性装を実践していた人々についても紹介する。

② 三代･山川永徳斎《日本武尊》
昭和時代初期(20世紀) 個人蔵

③《新蔵人物語絵巻》(部分)
室町時代(16世紀)
サントリー美術館
(前後期で場面替えあり)

2章　戦う女性ー女武者

戦場で戦うのは男性の仕事・役割と考えられていた時代において、甲冑を身に着け武具を持った女性は「異性装」の人物と捉えられるだろう。日本の神話や歴史には複数の「戦う女性」が登場する。本章では、九州征伐や三韓征伐をした神功皇后や、『平家物語』などに登場する巴御前 と静御前 、『吾妻鏡』の板額御前 といった平安時代末から鎌倉時代における女武者を題材とした作品を展示する。

いずれの人物も、その生没年から具体的な活動など不詳な部分も多くありながらも、その活躍は後世にまで語り継がれている。

左:④《朱漆塗色々威腹巻》江戸時代　彦根市指定文化財　彦根城博物館
【前期展示】 画像提供:彦根城博物館/DNPartcom
右:⑤法橋関月《巴御前出陣図》江戸時代(18世紀)　東京国立博物館
【後期展示】 Image: TNM Image Archives

3章“美しい”男性ー若衆

「若衆」とは一般に若い男性のことを言いうが、江戸時代には元服前のまだ前髪のある少年を指したり、場合によっては男色の対象となった「陰間」と呼ばれる少年や役者を指すこともあった。

本展では、まだ成人前の中性的な美しさや女性と見まがうばかりのたおやかさを備えた若衆の姿を描いた作品や、彼らの美意識を反映しているかのような振袖などを展示し、元服後の一般男性の枠を超え、ある意味で性の越境を示唆する若衆の姿を紹介する。

⑥《振袖 白縮緬地梅樹衝立鷹模様》
江戸時代(18世紀) 重要文化財
東京国立博物館【後期展示】
Image: TNM Image Archives

4章　江戸の異性装ー歌舞伎

安土桃山時代から江戸時代にかけて活動した出雲阿国が創始したとされる歌舞伎は、男装の阿国が女装をした夫とされる三十郎と戯れる「茶屋遊び」の演目で人気を博した。その人気が広まると、男装した遊女や女芸人による女歌舞伎、次いで元服前の少年たちによる若衆歌舞伎が誕生するが、いずれも風俗を乱すという理由から禁止とされた。その後、成人男性の役者が、芝居劇のような演目を演じるという形式とすることで興行許可を得た野郎歌舞伎は、男性の役者が女役もこなし、しっかりとした筋立てのある芝居が演じられるようになり、現在まで続く歌舞伎の基礎となっている。

⑦《阿国歌舞伎草紙》(部分)桃山時代(17世紀初期)
重要美術品　大和文華館【前期展示】

5章　江戸の異性装　物語の登場人物・祭礼

江戸時代に人気のあった小説や合巻などの読み物には、異性装の登場人物が活躍するものも少なくない。例えば、曲亭馬琴（滝沢馬琴）による『南総里見八犬伝』では、八犬士の1人である犬坂毛野は女装の剣士であり、さらにもう1人の犬坂信乃も幼少期に女装をして育てられた過去をもつ。これらの読み物は歌舞伎の演目にもなり、女装の盗賊である弁天小僧菊之介らの活躍を描く『青砥稿花紅彩画』（あおとぞうしはなのにしきえ）など人気を博したものも多い。

この他に、江戸の異性装の例として、山王祭や神田祭などにおける附祭（つけまつり）の中の、男装の女芸者による手古舞や獅子舞、助六、女伊達なども挙げられる。このような男髷を結い男装した女芸者たちによる出し物は、8月に吉原遊郭で催される祭りにおいても演じられた。

6章　近代における異性装

明治時代となり文明開化の名のもとに、それまでの慣習や文化、制度が革新された。このような流れの中で、国民の風俗や慣習を、異性装に対し抑圧的な文化的背景をもつ西洋諸国に対し恥ずかしくないものに矯正、整備することを目的として、違式詿違条例（いしきかいいじょうれい）が制定される。現在の軽犯罪法にあたる本条例には異性装禁止の項目も含まれた。歌舞伎役者など一部例外を除き、異性装という営み自体が刑罰の対象となり、違反者の摘発は当時の新聞でも報じられた。

これらの影響を受けたことで生じた異性装を嫌悪する感情は、1882年に異性装を禁じる法令がなくなった後も、それまでの新聞雑誌などメディアでの言説や、異性装や同性愛を精神疾患とみなす当時の誤った西欧精神医学の導入などにより、社会の中に流布されていた。

しかし、このような抑圧の中でも、自身の嗜好により異性装をする者や職業とする者は存在したほか、歌舞伎以外にも少女歌劇における男役が人気を博すなど、異性装の芸能に対する需要は失われなかったのである。

7章　現代における異性装

少女歌劇や舞踏など、表現の手段の一つとして異性装が取り入れられる舞台芸術のほか、漫画や映画などより幅広い分野において異性装のキャラクターや表現がみられるようになり、人々に熱狂や非日常的な世界への陶酔、笑いを提供する要素となっている。

しかし、恋愛・冒険・笑いといったエンターテイメントとしての要素を軸としながらも、着るべき服装、取るべき態度、ある性別でなければ果たせないとされる役割や身分といった「らしさ」の規定への問題提起となる作品も多い。

８章　現代から未来へと続く異性装

本章では、森村泰昌の「女優シリーズ」作品やダムタイプの《S/N》記録映像などを展示し、異性装と密接に結びつくジェンダーやセクシャリティに関する諸問題について考える。

加えて、日本におけるドラァグ・クイーンの黎明期に、グロリアス（古橋悌二）、DJ Lala（山中透）、シモーヌ深雪らによって始められた、ドラァグクイーンをフューチャーしたダンスパーティー“DIAMONDS ARE FOREVER”メンバーによる、本展のためのスペシャルなインスタレーションも展開。独自の美意識に基づく華麗な衣装やメイクに身を包みパフォーマンスをする彼らの表現は、まさに社会的・文化的に定められたジェンダー規範を打破したものである。

左：⑧落合芳幾（画）《東京日々新聞 969号 》 明治8(1875)年 3月 東京都江戸東京博物館【後期展示】

右：⑨昇斎一景《東京名所三十六戯撰　隅田川白ひげ辺》 明治5(1872)年　東京都江戸東京博物館【前期展示】

⑩濱谷 浩《東京浅草 国際劇場 男装の麗人ターキー リハーサルの夜》 1938年　東京都写真美術館

左：⑪森村泰昌《光るセルフポートレイト（女優）／白いマリリン》 1996年 作家蔵（豊田市美術館寄託）

右：⑫シモーヌ深雪＆D.K.ウラヂ《DIAMONDS ARE FOREVER ROYAL WIG》 2018年 DIAMONDS ARE FOREVER

◇ 会期中イベント

●記念講演会「写真でたどる女装と男装の近・現代史」

9月10日（土）午後2時～（約1時間30分）地下2階ホール

講師：三橋順子氏（社会・文化史研究者）

＊無料（要入館料）　＊定員40名（要事前申込、先着順）

【往復はがき締切】「9/10講演会」係まで。9/1（木）必着　1通につき1名のみ申込可

●スペシャル・トークセッション

「Drag Queen in Japan ～異性を装うとは何か？ ジェンダーとセクシュアリティの見地から～」

10月9日（日）午後5時～（約1時間30分）地下2階ホール

シモーヌ深雪氏×ブブ・ド・ラ・マドレーヌ氏×三橋順子氏（司会）

＊無料（要入館料）　＊定員40名（要事前申込、先着順）

＊本イベント終了後に展覧会をご覧いただくことはできません。予めご了承ください。

【往復はがき締切】「10/9トークセッション」係まで。9/30（金）必着　1通につき1名のみ申込可

●パフォーマンス記録映像　ダムタイプ《S/N》 特別上映

9月17日（土）**①午前10時30分～午後12時30分の回　②午後2時～午後4時の回**　地下2階ホール

オペレーター：山中透氏（作曲家、プロデューサー、DJ）

＊無料（要入館料）　＊定員40名（要事前申込、先着順）

【往復はがき締切】**参加希望時間帯を記載**のうえ「《S/N》特別上映」係まで。9/8（木）必着 1通につき1名のみ申込可

●ワークショップ「女装メイク講座」

プロのメイクアーティストによる女装メイク講座！初級者コースとテクニカルコースのいずれかをお選びください。

①初級者コース（メイク初心者向けにベースメイクからお教えします）

9月25日（日）午後12時30分～2時30分

②テクニカルコース（メイク中級者向けコース。二重にするには？つけまつげの付け方は？など様々な疑問にもお答えします）

9月25日（日）午後3時30分～5時30分　いずれも地下2階ホール

講師：美寿羽 楓氏（女装専門フォトスタジオ アルテミス　代表）

＊無料（要入館料）　＊定員各回15名（要事前申込、先着順）

＊各コースとも、それぞれ使用するコスメや道具をお持ちいただきます。詳細は当館ホームページをご覧ください。

【往復はがき締切】**参加希望回を記載**のうえ「メイク講座」係まで。9/15（木）必着　1通につき1名のみ申込可

●特別講座「日本における異性装ー展覧会開催にあたって」

10月1日（土）午後2時～（約60分）地下2階ホール

講師：西美弥子（本展担当学芸員）

＊無料（要入館料）　＊定員40名（要事前申込、先着順）

【往復はがき締切】「10/1特別講座」係まで。9/22（木）必着　1通につき1名のみ申込可

●学芸員によるギャラリートーク

9月23日（金・祝）、10月8日（土）、16日（日）　各日午後2時～（約40分）

＊無料（要入館料）　＊事前申し込みの必要はありません（要入館予約）

イベントの事前申し込みは往復はがき、または当館ホームページの日時指定予約サイトにて承ります。（1通または1回のお申込みにつき1名のみ申込可）

【往復はがき】

〒・住所・氏名・日中連絡のつく電話番号、参加希望のイベント名（「講演会」「トークセッション」「特別上映」「メイク講座」「特別講座」）をご記入の上、松濤美術館各イベント係まで。

＊「特別上映」および「メイク講座」は**参加希望時間帯**もご記入ください。

【予約サイト】

当館ホームページの日時指定予約サイトのカレンダーから、各イベントを選んでお申込みください。各イベントの20日前 24時から受付開始します。

＊迷惑メール等の受信制限をされている方は、事前に予約完了メール「@airrev.net」と当館からのメール「@shoto-museum.jp」が受信できるようにドメイン設定をお願いします。

◇開催概要

展覧会名　装いの力ー異性装の日本史　*The Power of Clothing: History of Cross-dressing in Japan*

会　期　2022年9月3日(土) - 10月30日(日)　※会期中、一部展示替えあり

開館時間　午前10時～午後6時（毎週金曜日は午後8時まで）＊入館は閉館時間の30分前まで
※本展会期中、毎週金曜日の館内建築ツアーは中止いたします。

入館料　一般1000円(800円)、大学生800円(640円)、高校生･60歳以上500円(400円)、
小中学生100円（80円）

＊リピーター割引：観覧日翌日以降の本展期間中、有料の入館券の半券と引き換えに、通常料金から2割引きでご入館できます。
＊(　)内は渋谷区民の入館料 ＊土･日曜日･祝休日は小中学生無料
＊毎週金曜日は渋谷区民無料　＊障がい者及び付添の方1名は無料

休館日　月曜日(ただし、9/19及び10/10は開館)、9/20(火)、10/11(火)

主　催　渋谷区立松濤美術館

会　場　渋谷区立松濤美術館　〒150-0046　東京都渋谷区松濤2-14-14
電話：03-3465-9421　HP：https://shoto-museum.jp

交通案内
●京王井の頭線 神泉駅下車徒歩5分
●JR･東京メトロ･東急電鉄 渋谷駅下車徒歩15分
※駐車場はございません

◇次回展覧会のご案内

「ビーズ－つなぐ　かざる　みせる　国立民族学博物館コレクション」
2022年11月15日(火)－2023年1月15日(日)

土日祝休日･最終週は日時指定予約制

新型コロナウイルス感染拡大防止の為、土･日曜日、祝日及び10月25日(火)以降の最終週は「日時指定制」を予定しております。詳細は当館ホームページ等でお知らせいたします。お出かけの際は、最新の情報をご確認ください。

報道関係のお問い合わせ

広報担当：西･木原･野城(pr-sma@shoto-museum.jp)　展覧会担当：西(nishi@shoto-museum.jp)
平塚(hiratsuka@shoto-museum.jp)

電話：03-3465-9421　FAX：03-3460-6366

＊画像をご希望の場合は、作品名の前にある番号をお知らせください。　＊画像のご利用後、データは破棄してください。
＊画像の使用は、本展のご紹介をいただける場合のみとしてください。　＊基本情報確認のため、一度校正をお送りください。
＊掲載後、見本誌をご送付くださいますようお願いいたします。